I-35

長谷寺本堂建地割図にみる計画意図の解明に関する一考察
『長谷寺本堂材木帳』の記載内容との検証を通して
Consideration of planning intention of Hasedera-Hondo plan drawn elevation and section Concerning with “Lumber-book of Hasedera-Hondo”

○加藤千晶[1]，重枝豊[2]
*Chiaki Kato[1], Yutaka Shigeeda[2]

This paper treats “Lumber-book of Hasedera-Hondo” and Hasedera-Hondo plan B drawn elevation and section, considered drawn on the occation of the Hondo reconstruction in 1650. “Lumber-book” inscribed with material, size, and parts, was made by Motoori Gorozaemon. It is likely to corresponds Hasedera-Hondo plan B.
This shows possibility that the inside of plan B can be clarified by a “Lumber-book”. Therefore, in this paper, comparing a “Lumber-book” with the plan B, clarify accordance relation of both data, and intended to reconstruct the interior.

１．はじめに

本稿で取り上げるのは，慶安 3 年（1650）年の長谷寺[1]本堂再建の際に作成とみられる『長谷寺本堂材木帳』（以下『材木帳』と略す）と本堂建地割図 B[2]である．『材木帳』は本折五郎左衛門[3]が作成した資料で，本堂の部材の材種，寸法，部材名，使用部位などが記されている．『材木帳』の柱などの部材寸法や，部材名と使用部位も現本堂の墨書にみられる表現と共通するが，『材木帳』内の「惣かわかいる又（総側蟇股）」や「見のつか（蓑束）」といった部材が本堂建地割図 B の意匠と一致することから，本堂建地割図 B と対応している可能性が高い．このことは，『材木帳』によって本堂建地割図 B の構造や内部の計画が明らかにできる可能性を示している．そのため本稿では，『材木帳』と本堂建地割図 B の内容を比較することにより，両資料の対応関係を明らかにすると同時に，本堂建地割図 B の内部空間の復元を行うことを目的とする．

２．本堂建地割図 B について

本堂建地割図 B は慶安 3 年の本堂再建の際に描かれたとされる三種の建地割図の内の一つである．縮尺 1/10 で描かれ，料紙幅が 4.2m 余と大きい．現本堂と基本的に同一の構造形式であるが，裳階部分の組物が出組で，中備を蟇股とし，軒支輪を描くといった差異が見られる．虹梁絵様は，現本堂と異なり若葉が描かれているが，おおむね現本堂と同一の傾向を示している．

３．『材木帳』における内部推定

『材木帳』によると，「外陣内室垂木」，「内陣内室垂木」，「内陣内室裏板」という部材がある．また，本堂建地割図 B の外陣が平天井を貼るのに妥当でない構造であることから，本堂建地割図 B の内陣と外陣において天井仕上が化粧垂木であることが推測できる．

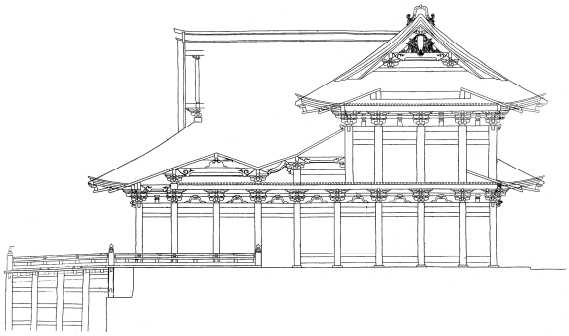

Figure 1. Hasedera-Hondo plan B

本堂建地割図 B の内部を再現するにあたり，まず『材木帳』に記載されている柱と垂木の情報から，『材木帳』の平面及び各柱間の枝割数を求める．Table 1.と Table 2.は『材木帳』に記載された柱と垂木をまとめたものである（但し Table 2.では野垂木について省略した）．「内陣柱」（長さ 36 尺）は厨子柱のことと思われ，「内陣柱」（長さ 32 尺）は正堂柱のことと考えられる．「東西のうツはり（梁）の上ノ柱」が 4 本あることから，正堂は現本堂と同じ平面となる．「北かわ礼堂柱」と「南入

Table 1. List of posts mentioned “Lumber-Atlas”

柱	材料	本数	長さ(尺)	径(尺)
内陣柱	欅	6	36	2.4
内陣柱	欅	24	32	2
外陣柱	欅	8	22.7	2
北かわ礼堂柱	欅	8	19.3	1.8
南入かわ礼堂柱	欅	8	24	1.8
礼堂かわ柱	欅	14	19.5	1.6
西東かわ柱	欅	14	16	1.6
東西うツ梁の上ノ柱	欅	4	15	2
ふたいノ柱	檜たゝき	30		1.6

１：日大理工・学部・建築，Undergraduate of Science and Technology, Nihon-Univ.　２：日大理工・教員・建築，Professer of Science andTechnology, Nihon-Univ.

Table 2. List of rafters mentioned”Lumber-Atlas”

垂木	材料	本数	長さ(尺)	幅(尺)
礼堂たるき	檜	87	27	0.5
礼堂たるき	檜	74	16.5	0.5
礼堂南かわひゑんたるき	檜	137	11	0.7
西東かわ礼堂ノ方たるき	檜	132	16.5	0.5
西東かわ礼堂ノ方ひゑんたるき	檜	158	11	0.7
本堂西東ノかわたるき	檜	84	20	0.5
本堂西東ノかわひゑんたるき	檜	84	11	0.7
本堂西東北かわ分たるき	檜	131	16.5	0.5
本堂西東北かわ分ひゑんたるき	檜	183	11	0.7
上重たるき	檜	120	16.5	0.5
上ノ重ひゑん垂木	檜	172	11	0.7
礼堂内室垂木	檜	87	11.5	0.5
石ノ間内室垂木	檜	87	10.7	0.5
外陳内室垂木	檜	87	13	0.5
内陣内室垂木	檜	78	16.5	0.5
内陣内室垂木	檜	65	8.5	0.5

かわ礼堂柱」の長さが異なるのは，柱が基壇上に載るか懸造となる部分かの違いであるとみられる.「礼堂かわ柱」と「西東かわ柱」の長さが異なるのも同様である．したがって『材木帳』に記された柱から，現本堂と同平面であることが判明した.

垂木の数からは各柱間の凡その枝割数を求めることができた.『材木帳』の奥行きの枝割数は本堂建地割図 B と一致した．東西方向では，「礼堂垂木」,「礼堂内室垂木」,「石ノ間内室垂木」,「外陣内室垂木」が各 87 本で，東西方向 7 間分の枝割数に相当することから，正堂の間口の枝割数は 87 枝と想定できる．また，「内陣内室垂木」（長さ 8.5 尺）65 本は、中央五間分の枝割

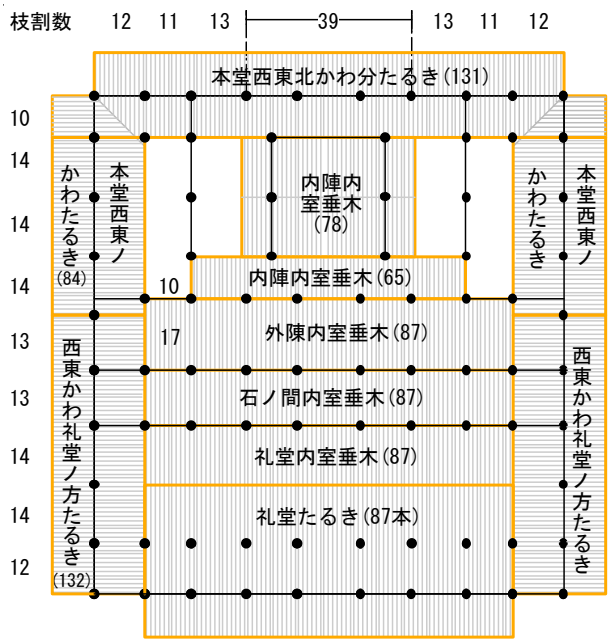

Figure 2. rafters allocation of “Lumber-Atlas”

数と考えられる．「内陣内室垂木」（長さ 1.6 尺）78 本は，奥行き 2 間と考えると，内陣中央 3 間の枝割数が 39 枝と考えられる．東西方向の裳階は，南北方向の裳階の枝割数 12 枝に相当する.

以上の平面の各枝割数の設定から,『材木帳』の垂木の配置が判明した（Figure 2.）．なお,「礼堂垂木」（長さ 27 尺）と「上重垂木」については垂木数は一致しなかった．そのため今後更なる検討が必要である.

以上のことから,『材木帳』及び本堂建地割図 B では，内陣及び外陣が，現本堂と異なり垂木をあらわにした化粧屋根裏として計画されていたことがわかる．一方で内陣両脇の局については，柱 4 本が大梁の上から立つことから，構造を隠すために平天井を貼ることが考えられるのであるが,『材木帳』内に平天井に関する記載がないのが疑問として残る.

３．おわりに

『材木帳』に記された柱と垂木から，平面と各柱間の枝割数が判明し，本堂建地割図 B と一致していることから,『材木帳』と本堂建地割図 B が対応している可能性は高い．現段階で判明した『材木帳』の垂木割りから，本堂建地割図 B で内陣及び外陣では化粧屋根裏が計画されていたといえる.

再建にあたって作成された他の本堂建地割図についても，外陣の構造が格天井を用いていなかったことが明らかであるため，その他の本堂建地割図でも内陣及び外陣の天井が化粧垂木として計画されていることが考えられる．したがって，慶安の長谷寺本堂再建計画では，当初は内陣と外陣を化粧屋根裏にすることを重点的に計画していたが，実施段階で格天井に変更されたことが明らかになった.

４．注

[1]真言宗豊山派総本山の寺院（奈良県桜井市）

[2] 建地割図とは建物の内部構造と立面を同時に表現した図面のことである．名称については『重要文化財長谷寺本堂調査報告書』から引用している（『重要文化財長谷寺本堂調査報告書』，奈良文化財研究所，2004）.

[3] 作成者の名前が文献中に出てくるのは，長谷寺においては延宝 8 年（1680）の本願院造立棟札，長谷寺以外では「和州平群之郡東林寺法加帳」に長谷の「五郎左衛門」と確認でき，寛永度の内裏造営にも参加していることがわかっているが，この 3 者が同一人物であるかは明らかではない．（前掲書[2]）